

私を変えた二日間

関西創価高等学校 2年

奥村 百合

心の輪。それは、自分から広げてこそ、相手も自分も幸せになれるものだと思います。私がそう考えるようになったのは、私が小学五年生の時の体験にあります。

私が小学五年生の時、授業の一環として、近くにある老人ホームに二日間クラスで行くことになりました。高齢者の方々との触れ合いを通して様々な事を学べる貴重な機会でした。私は、楽しみという気持ちよりも、高齢者、しかも認知症の方と上手くコミュニケーションができるのかという不安な気持ちの方が大きく、心配だったのを今でも覚えています。老人ホームに行く数日前、担任の先生から、私たちがそれぞれお世話になる高齢者の方のお名前と、その方の特徴や好きなことなどの発表がありました。私がお世話になる女性のその方の特徴は「耳の聞こえが悪い」でした。他の子たちは「話すことが好き」などポジティブなものが多く、私はさらに当日が不安になってしまいました。

そして迎えた老人ホームに行く日。私は双六や塗り絵を抱えて、やや重い足取りで向かっていました。そして、老人ホームに着き、高齢者の方々にご対面しました。「かわいい」とうれしそうに迎えてくださる方、ニコニコと見守っておられる方、何だろうと思議そうな目で見つめられる方。様々な方がおられ、賑やかな雰囲気の中、二日間お世話になる方との対面の瞬間がやってきました。

その方と対面した時、私はその方に、自分の名前を伝え、「よろしく願います」と挨拶しました。しかし、その方には聞こえず、今、何が起きているのか分からないといった感じが感じられました。その後もその方と双六や塗り絵をしました。私は、何とかして会話をしなければならぬと焦り、緊張して話しかけますが、声が小さくなってしまい、その方には届かず、その方についているスタッフの方が代わりに私の言葉を伝えてくださるなど、明らかに心の距離が遠いままでした。その方に声が届かないたび、施設のスタッフの方が気を遣ってくださるたびに、私は焦りや恥ずかしさ、情けなさが募り、心は塞ぎ、動作や言葉はぎこちなくなっていくばかりでした。こうして一日目が終了し、私は落ち込んで家に帰り、今日一日の自分を思い返しました。すると、その方と接するのを怖がり、心を通わせることを避けてしまっていた自分がいたことにはっとしました。相手がどんな人でも、どんな状況でも、自分の振る舞い一つで相手は変わる。全ては自分次第なのだということに気づいたのです。

そして迎えた二日目。もちろん不安はありましたが、私は、自分から心を開こうという決意で、老人ホームに向かいました。私は、昨日のように、双六や塗り絵はせずに、今日はその方とおしゃべりをしようと思い、その方に聞きたいことなどの話題を準備してきました。昨日は、自分の声が小さかったことを反省し、大きな声で、ゆっくりはっきりと話

しかけてみました。「好きな食べ物は何ですか。」「うーん。果物かなあ…。」コミュニケーションができた瞬間でした。私は、その方とお話できたうれしさと、昨日の自分を越えられた達成感が胸に込み上げてくるのを感じました。その後も「何の果物がお好きなんですか。」などの会話のキャッチボールが続きました。会話をするうちに、その方もだんだん心を開いてくださり、最終的には「今日はありがとう」と握手までしていただきました。私は、その方と別れる寂しさと、心がつながれたうれしきでいっぱいになりました。

この経験から私は、様々な人と関わっていく上で大切なことを学びました。それは、自分がまず心を開いて、勇気を出して話しかければ、必ず相手も心を開いてくれるということです。自分と相手はまさに鏡のようなもので、自分の振る舞いが同じように相手からも返り、全ては自分の心次第だということを強く実感しました。私は、これからの人生で、様々な人と関わっていく中で、相手に先入観をもち、殻に閉じこもるのではなく、まずは勇気を出して自分から心の輪を広げていきたいです。そして、多様な人と直接関わり、自身の視野を広げ、相手の気持ちに寄り添える、思いを馳せられる、思いやりのある自分に成長していく決意です。